

4大悲劇『リア王』

現代に投げかける“人生の答え”とは

これまで数々の蜷川シェイクスピア作品に翻訳者として関わってきた松岡和子さん。ここでは『リア王』の名台詞をいくつか引用しながら、劇の核心について解説してもらった。

文=岩城京子（フリーライター）



Cordelia
コーディリア（内山理名）

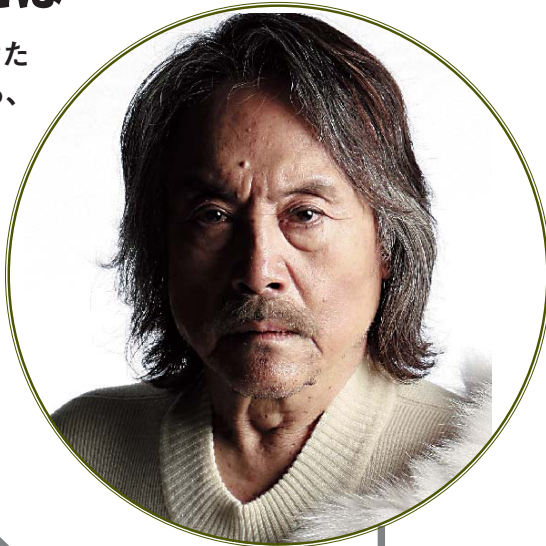
STORY

古代ブリテン、老齢に達した国王リアは自らの引退を宣言し、三人の娘を呼び集め「親を思う気持ちが最も深い者に、最も大きな贈り物を授ける。」と言い放つ。長女ゴネリル、次女リーガンは美辞麗句で父を称えるが、末娘コーディリアは素直な気持ちを伝え、父の怒りを買う。リアに勘当されたコーディリアはフランス王の求婚を受け宮殿を去り、王の乱心をいさめようとした忠臣ケント伯爵も国外追放を言い渡される。

リアの臣下、グロスター伯爵の嫡男エドガーは、父の財産と地位を狙う私生児エドマンドの策路にはまり、気遣い乞食に姿を変え荒野へ逃亡する。一方、手のひらを返したようなゴネリルとリーガンの冷酷な仕打ちに絶望の淵に突き落とされたリアは正気を失い、道化だけを伴い荒野をさすらう。嵐の荒野、風雨の中にリアの咆吼が響き渡る。そしてリアとグロスター、二つの家族全員に残酷な運命が待ち受ける……。

KING Lear

リア王（平 幹二郎）



三女

次女

長女

愛人

愛人

Regan
リーガン（とよた真帆）

Goneril
ゴネリル（銀粉蝶）

誰か教えてくれ、俺は誰だ？

（第一幕 第四場 リア）

リアの影

（第一幕 第四場 道化）

知恵がつかないうちに
年取っちゃいけないんだよ。（第一幕 第五場 道化）

ああ。必要を言うな。どんなに卑しい乞食でも
貧しさのどん底に何か余分なものを持っている。

（第二幕 第四場 リア）

Fool

道化（山崎 一）



Earl of Kent
ケント伯爵（嵯川哲朗）



Earl of Gloucester
グロスター伯爵（吉田鋼太郎）



庶子

嫡子



Edmund
エドマンド（池内博之）



Edgar
エドガー（高橋 洋）

松岡和子さんが『リア王』を読み解く！

読む人の年齢に応じて、心に迫る台詞が変わる。それが『リア王』のひとつの特長だと思います。私自身もシェイクスピアの翻訳に携わるようになって、ことあるごとに戯曲を読み返しますが、そのたびに自分の目に拡大されてくる台詞が異なる。最近では私も年齢的に“逆算の境地”に入ってきたせいか（笑）、ここで描かれる「老い」の問題に非常に強く惹かれます。

例えば、冒頭の国譲りの場。なぜあそこでリアは姉娘二人の甘言にばかり耳を傾けて、本音を言うコーディリアに怒りを向けるのか。これは誰もが一度はいぶかしむことでしょう。でも、実はそれが「老い」なんです。これは亡くなった劇作家の秋元松代さんが仰ったことです。耳に心地いい話しか聞こうとしなくなる、それが他でもない「老いの始まり」だ、と。シェイクスピアはそのことを、開幕早々にバンと提示してみせる。それにこの老い問題は、ゴネリルやリーガンなど次世代の人たちの視座に立てば「老害」としても受け止められます。今どき流行らない家父長的なオヤジさんがいつまでも権力を手放そうとせずにいる、周りの若者が迷惑がっている（笑）。それでリアは1幕5場で道化にく知恵がつかないうちに年取っちゃいけないだよ>とグサリと突かれる。これは私自身も肝に銘じている、とても好きな台詞のひとつです。

でも、もしかすると私が一番好きな台詞は4幕6場のリアの言葉かも。数あるシェイクスピア悲劇のなかでも副筋があるのは『リア王』だけですが、主筋であるリア&三人の娘の物語と、副筋であるグロスター&二人の息子の物語が、このドーヴァーの場面でびたっと交差する。正気を失くしたリアが目を見失ったグロスターの手を取ってこう言う。<お前のことはよく知っている。お前の名はグロスター>。これは今の英語で言えば<I know you well enough, your name is Gloucester.>。本当に中学校レベルの平易な英語！ シェイクスピアは、こんなシンプルな台詞にこの芝居のなかで最も劇的な知的行為、つまり「KNOW＝認識」を託しているんです。リアもグロスターもこれだけの代償を支払ったからこそ、ようやくこのドーヴァーの場で「認識」に至れる。私には、ここで初めてリアは「おじいちゃん、もう知恵がついたから年取っていいよ」と道化に許してもらえた気がする。リアはある意味では“解放”されて死んでいく。ですから『リア王』は決して絶望的で悲惨なだけの悲劇ではありません。確かに現実を認識するのはとても辛いことです。でもそれを知ったからこそ、リアはコーディリアとの再会の場で最高の歓喜を味わえる。シェイクスピアは「相手を認識する」家族の再会を、喜劇とロマンス劇でしか描いていません。唯一の例外は『リア王』。だから『リア王』は私に言わせれば「幸福な悲劇」なんです。

松岡和子（まつおか かずこ）

1942年旧満州新京（長春）生まれ。東京女子大学英文科卒業。東京大学大学院修士課程修了。翻訳家・演劇評論家。著書に『すべての季節のシェイクスピア』『シェイクスピア「もの」語り』、訳書に『くたばれハムレット』（P.ラドニック）、『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』（T.ストパード）などがある。現在、シェイクスピア戯曲の全訳に取り組んでおり、既刊は『ハムレット』『ロミオとジュリエット』『マクベス』『リア王』『夏の夜の夢・間違いの喜劇』『十二夜』『リチャード三世』『テンペスト』『ウィンザーの陽気な女房たち』『ヴェニスの商人』『ペリクリース』『タイタス・アンドロニカス』『コロオレイナス』『オセロ』。『お気に召すまま』（以上15本、筑摩書房・ちくま文庫）

